

言語文化研究の方法と課題（1）

斎藤武生

神田外語大学

言語文化研究の在り方を問題にしようとする場合、まず問われるのが「言語文化」とはなにかという問題である。「言語と文化」とか「言語の文化」など、関連して考えなければならない問題もあるが、本稿では、今日の理論言語学の言語観との関係で、言語文化とは I-言語によって生成される言語表現(linguistic expressions)の意であるとする考え方を提案する。脳内に表示される言語表現は直接目にはできないが、目に見えない世界に実在(reality)を見ることで言語文化は科学としての立場を主張するものである。言語文化研究によって言語表現に潜む文化的特質を明らかにしようとする場合、最も確かな証拠を提供してくれるのは、運用システムを経て生み出される言語表現の表れ(manifestations of linguistic expressions)である。人間の生き方とのかかわりで研究を推し進めようとする言語文化は「もう一つの言語学」を主張することになる。

1 「言語文化」の二つの流れ

一見あたらしい言い方とみえる「言語文化」という表現がわが国の学界にはじめて登場したのは戦前である。具体的にいえば、垣内松三の『国語の力』（第40版記念改版）が出た1936年にはじまると考えるのが正しいであろう。翌年には垣内の還暦論文集『言語文化体系』も出版されている。しかし、その後の戦争期および戦後の混乱期を経るなかで垣内の「言語文化」は忘れ去られる運命にあった（斎藤 [1983] 参照）。

「言語文化」という言い方が新たに登場してくるのは戦後しばらくたってからのことである。1975年を過ぎたころから、いくつかの大学がその開設授業科目名や研究紀要のタイトルに「言語文化」の名を使用するだけでなく、新設の学科名、学部名、さらには研究科名にその名を用いる例が多くなり、今日までその流れは続いているようにみえる。こうした動きを生み出した人たちの多くは外国語教育にたずさわる研究者であったことから、垣内のいう戦前の「言語文化」にどれほど通じていたかは疑わしい。ときには垣内の存在にすら気づいていないと思われる場合もないではない。

垣内松三の大きな貢献は国文学者、とりわけ国語教育の専門家としての貢献であった。外国語の教育にかかわる研究者が新たに言語文化の問題に関心を寄せはじめた時期の1977年、垣内の学問の全貌を見直そうとする動きがあり、『垣内松三著作集』が出版された。編集者の一人である波多野完治は、日本の

言語文化研究の転回点を代表する研究者として垣内の著作が「ていねいに読まれることを希望する」と述べたが、この呼びかけが当時「言語文化」を口にしはじめたばかりの外国語教育者の耳にまで届いたという様子はみられない。一方、国語教育の分野では、その後、1982年12月に『教育科学／国語教育』（明治図書）の臨時増刊号が出版され、垣内の見直しが行われている。しかし、特集のタイトルが「『国語の力』をこう読む」ということから推測できるように、寄稿された論文の多くは回想的で、垣内が意図した「巨大科学としての言語文化体系」への新しい取り組みはない。

2 「言語と文化」の問題点

2.1 言語と文化

「言語文化」という言い方には、垣内のそれとはまた別の、外国語の教育研究者を中心とした戦後の新しい動きがあったことを前節では見たが、彼らが「言語文化」によってなにを意味したのかははっきりしない。関係者の間での既定の了解事項であるかのように扱われ、正面からの議論を避けてきたという面があったようにも見える。言語文化という言い方には、ことばによる人間のさまざまな営みを含めることができることから、研究者の多様な研究分野を包括する便利な用語として、さらにいうなら、新鮮な響きをもつ専門用語として利用してきたという面もあるかもしれない。

しかしながら、「言語文化」という表現の使用はときに困難をもたらすこともあった。たとえば、大学の紀要にこの名を冠すると決めた後、英訳する段階で一時は *linguistic culture* としたものの、迷いが生じたのか、翌年には *language and culture* に改めるといった事例も観察される。今日では、「言語文化」の研究を名乗るいくつかの大学の研究紀要は *language(s) and culture(s)* の英訳名を使用し、すでに訳語として定着しているように見える。

しかし、よく考えてみると明らかのように、研究者が一方で「言語文化」と発想し、他方で「言語と文化」と表現するのは問題である。両者は明らかに異なる発想に支えられているからである。

わが国の過去の研究史をふりかえってみると、「言語文化」とは別に、「言語の文化」とか「言葉の文化」といった言い方が存在することに気づく。これらの言い方は「言語と文化」とか「言葉と文化」とは異なる発想に支えられ、成立している。後者は言語と文化をそれぞれ独立したものとして捉え、その上で両者を関係づけようとする発想であるのに対し、前者は言語の文化的側面を強調する言い方として用いられたものである。想起されるのは、戦争期の1943年に刊行された長谷川如是閑の『言葉の文化』と乾輝雄の『言語と文化』という2冊の書物である。予測できるように、問題の取り組み方には大きな違いがみられる。また、この問題に関連して、比較的新しいところで想起されるのは鈴木(1973)がその書名に「ことばと文化」を使用したことである。内容的には「言語文化」の研究として位置づけることができるが、著者自身が「言語文化学」を名乗るのはそれからしばらく後の鈴木(1998)においてである。

2.2 Language and Culture

前節では、「言語文化」の英訳として *language and culture* という言い方が一部で定着していることを見た。問題は、この英語の表現そのものに問題が含まれていることである。20世紀半ばのアメリカで、この点を指摘したのは当時の構造言語学を代表する研究者の一人 Charles F. Hockett であった。人類学の専門誌に投稿された歴史的にも大事な抗議文なので、さわりの部分を原文のとおり引用しておくことにする。

It is probably because of the separateness of the two traditions that we have the unfortunate habit of speaking of “*language and culture.*” We ought to speak of “*language in culture*” or of “*language and the rest of culture.*” From the fact that language is part of culture does not follow that we have, as yet, anything very significant to say about “*language in culture*” or the interrelationships between “*language and the rest of culture.*” Efforts are now being made to investigate such matters, and the term “*ethnolinguistics*” has been coined to subsume the investigations --- in a way, a term as superfluous as “*anthropological linguistics,*” since the simple term “*linguistics*” would be enough.

----- Hockett (1950)

要するに、言語は文化そのものであるのだから「言語と文化」ではなく、「文化のなかの言語」とか「言語とその他の文化」というべきだという主張である。1950年といえば、アメリカのいわゆる構造主義言語学の最盛期にあたり、言語学を人類学の一部に位置づけることを当然と考えていた時代である。その後への影響がどの程度のものであったかは明らかでないが、文献に *language and culture* に代わって *language in culture* が登場してきたことは容易に確認できる。

language and culture という言い方が改めて人目を引くことになったのは最近である。C. Kramsch がその著書のタイトルにこの表現を使用したからである。出版されたのは20世紀も終わりのころの1998年である。ただ、Kramsch がカリフォルニア大学バークレー校のドイツ語および外国語習得の教授ということ考えると、半世紀前の Hockett の抗議には不案内であったという事情も推測できる。本文に Hockett への言及が見られないことがそのことを裏づけているかもしれない。

本節では、「言語と文化」とか *language and culture* という言い方に問題があることを見た。しかし、Hockett の指摘が現在でも正しいかどうかということになると話は別である。今日のように、生物言語学 (*biolinguistics*) とか生物言語学的アプローチ (*biolinguistic approach*) といった生成文法の言語学観が主張され、脳内の言語器官 (*language organ*) としての言語が問題となる時代にあっては、言語と文化の関係がどのようなものとして位置づけられるべきか、改めて考えてみる必要がある。

2.3 Cultural Linguistics (文化言語学) をめざす動き

人類学(anthropology)の一部に位置づけられるアメリカの言語学はときに anthropological linguistics (人類言語学) と呼ばれ、この名をそのまま雑誌名とした研究誌も存在している。しかし、先の Hockett が指摘しているように、言語学がすでに人類学であるとするなら、linguistics にわざわざ anthropological(人類学的)という修飾語をつけることは意味のないことである。代わって使用されるのが linguistic anthropology(言語人類学)という言い方である。最近では Salzman(1998)や Duranti(2001)がこの言い方を書名や書名の副題に使用している。親族語(kinship terms)や色彩語(color terms)などに関する研究がよく知られている。

理論生物学としての言語学が真剣に主張される時代にあって、人類学の一部としての伝統的な言語研究が健在であることは好ましいことである。研究者の関心が「人間言語」の問題であり、究極的には「人間」の問題であるとするなら、いろいろな角度からの人間研究は常に必要である。言語人類学のほか、自然/生物人類学(physical/biological anthropology)、文化人類学(cultural anthropology)、考古学(archeology)といった分野が人類学の全体を構成している (Salzman[1998]参照)。

言語人類学が言語と文化の関係を話題にするとき、きまっかかかわってくるのがいわゆる言語相対性 (linguistic relativity)の問題とかサピア・ウォーフ仮説(Sapir-Whorf hypothesis)の問題である。これらの問題に関する議論を総括するかたちで編集された Gumperz-Levinson(1996)や Duranti(2001)は今日でもそれなりに興味ある話題を提供してくれるが、ここで特に注目したいのは、こうした伝統的な言語人類学の流れが近年の認知言語学(cognitive linguistics)と結びつき、新しい文化言語学(cultural linguistics)の理論化をめざす動きを見せはじめたことである。Palmer(1996)がその例で、言語人類学の3つの伝統、すなわち ボアズ言語学(Boasian linguistics), 民族意味論(ethnosemantics), ことばの民族誌学(the ethnography of speaking)といった分野の研究者が興味の対象としてきた現象に認知言語学の視点から光を当てようとする試みである。Palmerが認知言語学として特に注目しているのは R.W. Langacker や G. Lakoff の研究である。言語人類学と認知言語学の統合(synthesis)をめざすねらいは大変興味深いのが、著者のその後の研究活動は人類学という枠にとどまるかたちのものであると思われるだけに、どの程度まで「文化言語学」としての理論化が期待できるかはっきりしない。その後の Palmer & Occhi(1999)などからも読み取れるように、文化言語学の名で呼ぶ、呼ばないは別にして、その研究成果が他の研究者を巻き込むかたちで拡大していることは見て取れる。また、Palmer(1986)が出版された翌年に Holland & Quinn(1987)が出ていることも忘れてはならないであろう。これなどは認知言語学者と人類学者が共同して言語と文化の個別の問題に取り組んだものとも言えるもので、実質的に、文化言語学の実証的研究例とってよい性質をそなえている。これらの研究で提起された興味ある問題については稿を改めて論じることにはしたい。

人類学者(anthropologist)であると同時に民俗学者(folklorist)でもある

Alan Dundes の研究もまた忘れてならないものの一つである。少しだけ時間は遡るが、著者自身の13編の論文を集めた Dundes (1980) は民俗学が単に資料を収集するだけでなく、それをどう解釈していくかという問題に真剣に取り組むべきだという主張を背景にもつ論文集である。民俗理論(folklore theory)の確立を指向した論文集とみることもできる。民俗学者が民俗(folklore)という言い方でとかく常民の生活(folk life)を想起しやすいなかで、Dundes は常民のことば(folk speech) を重視し、常民のことばと文化・世界観(worldview) とのかかわりを問題としたのである。文化言語学の名で呼ぶのはためられるが、紛れもなく科学としての民俗学(folkloristics)を指向した研究で、言語文化研究の典型的な在り方の一つの例を示したといってもよい。これもまた、稿を改めて論ずべき問題を含んでいる。

3 言語文化研究の位置づけ

3.1 「言語と文化」の考え方

Hockett (1950) が「言語と文化」という発想に問題があると指摘したのは、言語を文化の一部と考えていたからであった。もし今日の生成文法のように、言語は遺伝的なものであるという点を重視するなら、「言語と文化」という言い方が特に問題になるということはないであろう。

そこで浮かび上がってくるのが、「言語」とはなにか、そしてさらにいうなら、「文化」とはなにか、という最も基本的な問いである。言語についての問いはしばらく措くとして、文化の定義については、Hockett の抗議文が出てから2年後に Kroeber & Kluckhohn (1952) が公刊され、いかに難しい問いであるかが明らかにされたという過去の歴史が想起される。この本は culture という語の意味的な変遷を辿ると同時に、この語をめぐる過去の定義を網羅的に集め、批判的にコメントしていくといった作業に正面から取り組んだ労作である。その後半世紀を経た現在、その後の社会学者や人類学者の議論が加わることで、学者間に共通した理解がはたして生まれたのかどうか詳らかでない。

日本語の「文化」ということばの歴史については柳父(1995)の興味深い研究があるが、当面の課題は「文化」によってなにを意味するかという問題である。この点については、鈴木(1973)が「まえがき」の部分で述べている考え方、つまり「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動様式上の固有の型(構図)のことである」、「つまり文化とは、人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社会的強制(慣習)の部分をさす概念だ」という考え方で当面は十分であると思われる。この理解の仕方によれば、言語の遺伝的側面を強調する反面で、文化の伝承性を強調することも自然なかたちで行うことができる。

3.2 「言語文化」の問題点

「言語文化」という言い方もまたいくつかの問題を提起している。すでに見たように、英語に翻訳するときが一つの問題である。language and culture と

表現したのでは物の見方に違いが出てくるのは避けがたい。linguistic という語に“of or relating to language”の意味があることを考えるなら linguistic culture と表現することで「言語の文化」を意味することはできる。しかし、一方で linguistic には linguistics の形容詞としての意味も確立しているので、誤解が生じやすいという難点も無視しがたい。そうすると直訳して language(-)culture とするのがよさそうに思えてくる。しかし、日本語の「言語文化」が日本語の語構成にしたがって、全体として単一の概念を表現していると考えられるので、この英訳には多少無理があるようにみえる。造語を考えるなら、languculture が一つの案として浮かび上がってくる。言語と文化の両方を包括する複合体(complex entity)としての理解が容易であることから、すでに使用しはじめた研究者もいる。

日本語の「言語文化」という言い方そのものにも問題は潜在している。たとえば、言語文化の研究をめざす学問をかりに「言語文化学」と呼んだ場合、読みとしては「言語文化の学」を意図しているはずであるが、「言語の文化学」の読みもまた生じうる余地があるとみえるからである。

「言語文化」ということばに潜在するこうした危うさが、垣内松三の場合、言語文化体系を構想だけで終わらせることにもなったということを想起すべきであろう。垣内がめざしたのは「国民言語文化」の体系化であったが、周囲の人がこれを短縮して「国語文化」と呼ぼうとしたとき、垣内はこれに反対せず、それもよいであろうと述べて黙認する姿勢をとった。このことが、結果として、言語文化研究のその後の発展を阻害する要因の一つとなったことは否定しがたい。なぜなら、国民言語文化という表現を短縮して国語文化という言い方を認めるということは「国民言語の文化」、つまり「国語の文化」の発想を許すということを意味するからである。その段階で垣内のめざしたはずの「言語文化」の発想が消滅してしまったのである。言語文化の発想を含まない「国語文化」はその後一人歩きをはじめ、国語文化学会とか『国語文化講座』（朝日新聞社）などの誕生につながり、太平洋戦争に突入していくことになる。

3.3 「言語表現」としての言語文化

言語文化とはホリスティック(holistic)な概念で、「言語と文化」とはもとより、「言語の文化」とも異なる一つの独立した概念領域を表現している。この概念領域をはっきりさせ、研究対象として位置づけるためには、今日の理論言語学を代表する生成文法の言語観を知ることからはじめるのがよいであろう。

生成文法の言語観および文法観の確立はほとんど Noam Chomsky 一人によってなされてきたという点でかなり特異な歴史をもっている（詳細については斎藤[1990]参照）。基本的な考え方は当初から変わっていないとする見方も不可能ではないが、思索が深まる過程でみられた Chomsky 自身の迷いとか混乱といったものが用語の変更・修正といったかたちで記録されてきたことは確かである。生成文法が、ブルームフィールド流構造言語学の言語観から解き放たれ、独自の言語観を語りはじめるのは 1980 年代の中頃からで、たとえば Chomsky(1986)は第 2 章を“Concept of Language”の議論に当てている。言語と文法の関係、I-言語(Internalized Language)と E-言語(Externalized

Language)の違いなどが論じられている。その後、Chomsky(1995)を経て生成文法の研究はミニマリスト・プログラムという新しい研究段階に入るが、Chomskyがあらためて言語観と文法観をめぐる議論に集中するのはまもなく21世紀を迎えようかという時期であった。Chomsky(2000a-d)やChomsky(2001)の議論がそれを代表している。

この時期の修正で特に注目したいのは、I-言語とE-言語という、あたかも対立する二つの言語が存在するかのような印象を与える言い方をやめたことである。I-言語については従来とおなじように、言語能力(faculty of language; FL)の初期状態(initial state; LAD)に経験(the course of experience)が入力として与えられ、その出力として得られる個別言語のことをI-言語の名で呼んでいる。I-言語は言語能力(FL)が一定の時間の経過を経て獲得した安定状態(steady state)のことをいう、と表現することもできる。そのI-言語が生成する表現、つまり「言語表現(linguistic expressions)」をかつてはE-言語と呼んでいたが、誤解を招きやすいことからこの言い方を避けることにしたのである。言語とは常にI-言語を意味することになる。そのI-言語は計算システム(computational system)とレキシコン(lexicon)とから成り立っている。

I-言語が生成する表現の無限の集合を、以前は「文の無限の集合」とか「発話の無限の集合」と読み代え、ブルームフィールド流の言語観を採用していたのがChomskyであった。近年になって、その読み代えを放棄するとともに、「言語表現」を脳内の表示(representation)として位置づけたのである。表示としての言語表現は運用システム(performance systems)を経由して表面化するが、それを「言語表現の表れ(manifestations of linguistic expressions)」と呼び、脳内に表示される言語表現そのものとは明確に区別したのである。言語表現が現象として表面に表れたものは耳で聞いたり、目で見たりすることもできるが、脳内の言語表現は直接観察の対象にはならない。言語表現が目に見えない(invisible)ものとしての位置づけを得たことで、そこにリアリティを求める科学研究が、ようやく言語表現についても可能になったとすることができる。本稿では、この言語表現を指して「言語文化」と呼ぶことにする。言語文化研究とは、したがって、「言語表現」の文化的研究を意味することになる。

Chomsky にとっての自然言語(natural language)とは言語能力(FL)と運用システムとを含むものである。インターナリスト(internalist)としてのChomskyの立場からするならば、遺伝的に決定される言語能力(FL)こそが自然物(natural object)であり、理論言語学の研究対象としての位置づけを受ける。いうまでもなく、ここで言う言語能力(FL)とは初期状態から安定状態までの変化・成長を想定した概念で、特定言語の知識を意味する linguistic competence (言語能力)とは区別される。

言語の認知システム(cognitive system)としての言語能力(FL)が今日の生成文法の中心的研究課題になっていることは周知のとおりである。最近では、その外側にある言語外システム(extralinguistic system)としての二つの運用システム(つまり、感覚・運動システムと思考のシステム)とのインターフェイス関係の理論研究も少しずつ進みつつあるように見える。しかし、今後どのような証拠に基づいて言語学としての理論化をめざすのか、むずかしい問題も残さ

れている。

生成文法研究の在り方という視点から問題をみるなら、言語能力(FL)の計算システムに焦点を当て、その普遍性を研究課題として強調するのは理解できる。しかし、言語の特異性(idiosyncrasy)にかかわる語彙の研究もまた重視されなければならない問題である。

言語習得のインプットにかかわる言語環境の違いがI-言語の違いを生み、さらに言語表現の違いを生み出す。こうした違いに深くかかわってくるのが、言語環境の大きな部分を占める語彙の問題である。日常の語彙の意味には、その言語圏で培われた思考様式のありようが深くかかわっているのがふつうである。たとえば、「声をかける」「期待をかける」における「かける」には社会における不平等な人間関係が写し取られている(斎藤[1983]参照)。このことが「街で先生が生徒に声をかけた」と「(?)街で生徒が先生に声をかけた」の微妙な違いにも反映していると考えられるが、こうした問題の扱いは生成文法の枠内では処理できないであろう。また、たとえばLakoff & Johnson(1980)の概念メタファー(conceptual metaphor)とかかわる言語表現の問題はその言語圏の生き方にかかわる問題で、興味深いものがある。しかし、言語の普遍性を重視する生成文法研究の枠からは外れている問題である。

言語表現と運用システムとのかかわりについての研究は近年の生成文法でもようやく見られるようになってきた。「言語表現は運用システムから求められる一定の条件を満たすとともに、他方では運用システムに対して指令(instructions)を提供し、その結果として言語表現の表れを生む」という発言はChomskyの最近の考え方を簡潔に整理して述べたものである。この発言に含まれる「言語表現の表れ」こそ、実は、言語文化研究が直接観察の対象とすべきものである。そして、さらに言うなら、その観察を踏まえ、脳内にあって直接的な観察を許さない「言語表現」そのものの文化的解明をめざすのが言語文化研究である。その際、証拠として主要な役割をはたすのは表れ・現象としての言語表現であるが、ときには非言語行動(nonverbal behaviors)が証拠として有効にはたらくこともある。しかし、後者は他文化圏の影響を受けて変わりやすいという弱点があるので、一般には、言語文化研究の二次的証拠にとどまることが多い。

表れとしての言語表現を構成する単語一つひとつがその言語圏の文化遺産(cultural heritage)だとする見方もあるが、単語が組み合わさった句とか文を文化遺産として強調することもできる。さらに、談話レベルでの文化遺産ということも考えられる。たとえば、1897年9月21日付のNew York Sun新聞に掲載されたFrancis Churchの“Is There a Santa Claus?”という社説記事は1世紀を過ぎた今日でも貴重な言語文化遺産としての位置を保ち続けている。

しかし、言語表現のすべてが文化遺産だと主張することは、結局なにも主張しないことにもなりかねない。そこで大事なことは、有標(marked)と思われる言語現象に目を向けることである。その際、注意を要するのは、一見したところ日常的で無標(unmarked)の現象としか見えないもののなかに、その言語圏の重要な物の見方・考え方が隠されている場合があるという点である。たとえば、斎藤(1983)の例で言うなら、日本語で「(から)足を洗う」が比喻をつくるの

に、英語圏では“wash one’s hands (of)” が比喩をつくるという事実がある。これらの表現に関連する多くの言語表現を「有標・無標」という観点から考察することで、その背後に隠された物の見方・考え方の違いを探り出すのが言語文化研究の一つの方法である。歴史的(diachronic)な説明もときには有効だが、共時的(synchronic)な視点に立つ説明をめざすのが言語文化研究の基本的な在り方である。断片的な観察からはじめて、体系的な議論にまでどう発展させるかが問われることになる。

3.4 「文化言語学」としての言語文化研究

言語表現を言語文化の名で呼ぶ、というのが前節でのいわば結論であった。言語表現は計算システムとレキシコンとからなる I-言語によって生成されるもので、そこにはその言語圏の物の見方・考え方が潜在していると考えられる。言語表現とインターフェイス関係をつくる運用システムの一つは思考のシステム(system of thought)、概念のシステム(conceptual system)、概念・意図のシステム(conceptual-intentional system)などの名で呼ばれているが、このシステムを含めて「自然言語」とみなされるので、言語表現を研究対象とする言語文化学は、いわゆる理論言語学ないし生物言語学に対し、自然言語を扱うもう一つの言語学とみなすことができる。両者の違いについては、Chomsky 流の理論言語学がインターナリストとして I-言語を“natural object”とする方法論上の立場をとるのに対し、言語文化学は I-言語と運用システムとの接点にある言語表現を“cultural object”として捉えようとする、という言い方をすることもできる。もしこの言い方が正しいとすれば、前者を自然言語学(natural linguistics)、後者を文化言語学(cultural linguistics)と呼ぶことで二つの言語学を区別することもできる。自然言語学は I-言語の計算機構を主たる関心事として文法による説明をめざすが、文化言語学の主たる関心は文法によって説明されるような計算機構そのものの問題ではなく、派生的に得られる言語構造、とりわけそこに含まれる語彙の文化的特質に向けられることになる。

理論言語学が人間言語の遺伝的側面を問題とするのに対し、言語文化学は人間言語の文化的側面を問題にする、ということもできる。人間は言語をもつことによって人間としての位置づけを得ていることを考えるなら、人間にとっての言語は人間から独立しては存在しえないものである。この分割しえないはずの人間言語(human language)を「人間(Human)」と「言語(Language)」とに分割し、その上で両者の間に人間が言語を「知っている」とか「所有している」という関係で結びつけようとするのが言語学の方法である。そして、人間言語を取り巻く状況として「自然」と「文化」という対立する二つの概念を配し、前者について理論言語学は人間の脳内に実在する物としての言語能力(FL)を自然物に見立てるというインターナリストの立場をとったのである。一方、言語文化学は人間言語の遺伝的側面よりは、人間言語の動的な営みおよびその産物の方に視点をおいて自然言語を見ていこうとするものである。どちらの立場をとるにしても、目に見えない世界に実在を見ようとする実証科学としての立場をとることに変わりはない。ただ、Chomsky 自身が示唆しているように、もし理論言語学が言語以外の証拠、つまり、生物学的な証拠によってその理論の在り

方が議論されるような時代を迎えるとしたら、言語学はもはや人文科学的な言語学ではなく、また自然科学的な生物言語学などでもなく、生物学そのものの一分野とみなされる時代を迎えることになる。そのときは、自然言語学という学問分野が消滅するときである。Chomsky がインターナリストという立場を鮮明にしたことでこうした方向性はある程度実現の可能性のある問題となってきた。生物学者の側からはすでに歓迎のことばも聞かれる。しかし、最近のChomsky はこの問題に関してかなり慎重であるようにもみえる。たとえばJenkins(2000)の生物言語学という言い方にはそれなりに評価しながらも、みずからは生物言語学的アプローチとか生物言語学的枠組み(biolinguistic framework)といった表現を用いることが多く、生物言語学という言い方そのものは意図的に避けているようにみえるからである。

一方、言語文化学の場合は、すでに述べたように、言語表現に隠された物の見方・考え方を解明しようとする際の証拠が、基本的に、表れ・現象としての言語表現であることから「もう一つの言語学」としての位置づけに変更はない。福井(2001)の指摘どおり、生成文法に代表される理論言語学は明らかに自然科学としての言語学を指向しているが、言語文化学の研究は言語による人間の営みに関心を向け、人間の生き方と深くかかわるかたちでの研究を推し進めようとするもので、人文科学としての言語学を主張することになる。

参考文献

- Burke, L., T. Crowley & A. Girvin, eds. 2000. *The Routledge Language and Cultural Theory Reader*. Routledge: London & New York.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Prager: New York.
- 1995. *The Minimalist Program*. The MIT Press: Cambridge, Mass.
- 2000a. *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge Univ. Press: Cambridge.
- 2000b. Derivation by phase. In K. Inoue, ed., *Report(4): Re-searching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, 1-45. KUIS.
- 2000c. Minimalist inquiries: the framework. In R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. The MIT Press; Cambridge, Mass.
- 2000d. Linguistics and brain science. In A. Marantz, Y. Miyashita, & W. O'Neil, eds., *Image, Language, Brain*. 13-28. The MIT Press: Cambridge, Mass.
- 2001. Beyond explanatory adequacy. Ms., MIT.
- Dundes, A. 1980. *Interpreting Folklore*. Indiana Univ. Press: Bloomington.
- Duranti, A., ed. 2001. *Linguistic Anthropology: A Reader*. Blackwell: Malden, Mass.

- Gumperz, J. J. & S. C. Levinson, eds. 1996. *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge Univ. Press: Cambridge.
- Hockett, C. F. 1950. Language "and" culture: a protest. *American Anthropologist* 52, 113.
- Holland, D. & N. Quinn, eds. *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge Univ. Press: Cambridge.
- Jenkins, L. 2000. *Biolinguistics*. Cambridge Univ. Press, Cambridge.
- Kramsch, Claire 1998. *Language and Culture*. Oxford Univ. Press: Oxford.
- Kroeber, A. & C. Kluckhohn. 1952. *Culture: A Critical Review of Concepts And Definitions*. The Peabody Museum, Harvard Univ. Cambridge, Mass.
- Lakoff, George & Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The Univ. of Chicago Press: Chicago.
- Palmer, G. B. 1996. *Toward a Theory of Cultural Linguistics*. Univ. of Texas Press: Austin.
- & Debra J. Occhi, eds. 1999. *Languages of Sentiment*. John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia.
- Salzmann, Z. 1998. *Language, Culture, and Society (2nd ed.)*. Westview Press: Colorado.
- Stroinska, M., ed. 2001. *Relative Points of View: Linguistic Representations of Culture*. Berghahn Books: New York, NY.
- 乾 輝雄 1943 『言語と文化』国語文化研究所
- 垣内松三 1937 『言語文化体系』不老閣書房
- 斎藤武生 1983 『言語文化学事始』（開拓社言語文化叢書）開拓社
- 1990 「言語学と言語文化学 —— チョムスキーの言語観とそれが示唆するもの」『言語文化の理論的・実践的研究』1-16頁 筑波大学
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』（岩波新書）岩波書店
- 1998 『言語文化学ノート』大修館書店
- 長谷川如是閑 1943 『言葉の文化』中央公論社
- 波多野完治他（編） 1977 『垣内松三著作集（全9巻）』光村図書
- 福井直樹 2001 『自然科学としての言語学：生成文法とは何か』大修館書店
- 柳父 章 1995 『一語の辞典 文化』三省堂

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究科

saito-t@kanda.kuis.ac.jp